

「感謝」

日中活動支援部会長 小野寺 洋恵さん(夢の森)～気仙沼市



令和2年4月より、日中活動支援部会の部会長をさせて頂いております社会福祉法人洗心会 生活介護事業所「夢の森」の小野寺洋恵と申します。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

東日本大震災から10年が過ぎようとしています。あの日、夢の森では降園の準備をしている際に経験したことのない大きな揺れに見舞われました。海から離れたところに建っているのに直接的な被害はありませんでしたが、送迎コースが津波の被害にあったために家に帰れない多くの利用者が夢の森に留まりました。皆で高台の市民体育館に避難し、寒く不安な一夜を励まし合いながら過ごしたのを覚えています。それ以降、環境が変わった利用者、家族と共に無我夢中で日々を過ごす中で、国内外から数えきれない温かいご支援をいただきました。当たり前にあった水や電気のない生活を送る私達に、「これが必要なのではないか？困っているのでは？」という視点から届けられた様々な支援物資には感謝の言葉しか浮かばず、あの時ほど人と人との繋がりの大切さを痛感したことはありません。震災時の恩返しは未だできていませんが、コロナ禍においてエッセンシャル・ワーカーとして私達ができることを行うことで、皆さんから頂いたご厚情に報いることに繋がればと思う毎日です。

大変な状況ではありますが、コロナウィルスの収束と、皆様のご健康をお祈り申し上げます。

「東日本大震災を振り返って」

相談支援部会長 相澤 安伸さん(東まつしま地域生活支援センターカノン)

東日本大震災当時も、現在と同じく相談支援業務を行っていました。「カノン」までは、海から直線で約3kmの距離にあり、事業所まで津波が到達するとは考ええず、津波を目視し、慌てて利用者と一緒に逃げた事を思い出します。自宅は海から200mの距離にあり流失してしまいましたが、家族の安否を確認後は、利用者支援に気持ちを切り替え、取り組みました。震災の翌日より、独居の方や障害者世帯などの安否確認、避難所回りを始めました。何をしたら良いかわからず、皆が大混乱を起こしていました。無力感を感じながら、初めは傾聴する事しか出来なかった事を思い出します。時間の経過とともに、生きるための支援～生活するための支援にニーズは変わり、生活の場も避難所～仮設住宅～復興住宅等となるなど生活環境も変わり、その都度、関係機関と必要な支援を考えながら、支援に当たりました。

東日本大震災から10年が経過しました。現在、市内の相談支援事業所と連携を密にし、災害が起きる事を想定し、地域の方との顔の見える関係を作り、利用者一人ひとりの名簿等の整理や被災時の行動計画の検討など、普段の業務の中から対策の検討をしています。東日本大震災の様に想定外の規模の災害が起き得る可能性があると思いますが、日頃からの準備を大切に、今後も利用者支援に当たりたいと思います。

編集後記

東日本大震災から早10年になります。そんな矢先の2月13日深夜に大きな地震があり、「またか!」と当時を思い出した方も多かったと思います。改めて、災害への備えの大切さを痛感した出来事でした。

お忙しい中、震災10年を振り返り、寄稿いただいた皆様に心より感謝申し上げます。



宮知福協だより

NO2

発行 宮城県知的障害者福祉協会
発行責任者 会長 二階堂 明彦
宮城県障害者福祉センター 事務所
電話 022-293-4005
発行日 令和3年3月 吉日

「昔を振り返り今後を考える」

宮城県知的障害者福祉協会 副会長 田切 富之

大学卒業後初めて施設職員になったころを振り返ると、入所施設職員となり、4名1部屋での生活で、テレビも無くおやつや飲み物も決められた時間に配るなどの生活でしたが、報告書作成なども少なく、利用者と接する時間は現在より有ったような気がします。利用者も在宅の頃は、家族以外の人に知られずに生活している人もいて、家族も将来のことを不安に思いまた障がい者が楽しく生活できる場として入所施設を希望いたしました。家族との合同レクリエーションなども年に数回あり、保護者と話をする会も多かったし利用者も楽しみにしていました。平成に成った頃から、地域で障がい者が通所施設利用で作業・生活の場が増え、入所施設利用でなくグループホーム希望者も増えてきました。入所授産施設の利用者グループホームを希望し、入所授産施設を希望する人が減ってきた頃から、障がい者は地域で生活するのが望ましいと言われ、親も障がいを持っている我が子の生活の場を地域と考えた。地域に障がいが増えることで、地域にも障がい者を理解してくれる住民も多くなり、国でも地域で生活する為のサービスを考えて頂き生活しやすくなりました。令和に成ってからも地域での福祉サービスは増えていますが、障がい者が自宅に帰ってからの不安が多くなってきています。障がい者本人の不安でなく、親亡き後「家で生活、日中活動が利用できなくなったら」と親は不安を感じていますが、まだ現実と感じる年齢になっていない為か、答えは出てません。福祉はその時々障がいを持っている人に合わせて変化していく必要が有ると思います。それを考えて支援していくのは、親であり、障がい者と常に接している支援者だと思います。立ち止まらず障がい者の為に進んで行こうではありませんか。

私事で申し訳ありませんが、令和2年度で退職となります。今まで会員の皆様のご協力を感じ感謝申し上げますとともに、今後とも福祉協会へのご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



「震災10年を振り返って」 施設長 福地 慎治さん(つどいの家・コペル)～仙台市若林区

今回の原稿を作成するにあたり、自宅の本棚に置いている2011年の手帳を開きました。当時は障害者相談支援事業に従事していた為、相談や支援会議の日程が書き込まれていましたが、3月11日(金)の午後以降の予定には全て赤色のボールペンで取り消し線が書かれていました。同じ事業所の相談支援専門員と共に利用者宅へ伺い安否確認を行なったことなど当時の記憶が甦ってきました。そして、献身的な対応や震災のストレスの反動で心身の不調を来した同僚の顔、同じくストレスや活動制限に伴い身体機能が低下し、表情が乏しくなってしまった利用者や相談者の顔も同時に甦ってきました。

当法人のみならず、県内の事業所、そして障害福祉サービスを利用する本人やご家族にも体験したことのないような被害と喪失感をもたらした大災害ですが、同時に震災を機にこれまでのご縁を実感すると共に、新たなご縁をいただいたことも事実です。まさに「つながる」ことの大切さを実感しました。東日本大震災以降も豪雨、台風、地震、猛暑など自然災害が全国各地で発生しています。そして、各地の福祉従事者が学び、生きづらさを抱える方々の為に頑張っています。自然災害が普段の生活により近くなりつつあるこの時代だからこそ、日々の備えと人とのつながり、有り難さを感じる心を大切にしなければならぬと改めて感じました。合掌。



当事業所を会場にして行われた炊き出しの様子